

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01575

研究課題名（和文）ポスト農業社会の食・農・自然に視点をおいた農業社会学の構築

研究課題名（英文）A Composition of Rural Sociology from the Perspectives of Nature, Agriculture, Food and Family Life in a Post-agricultural Society

研究代表者

牧野 厚史（MAKINO, ATSUSHI）

熊本大学・大学院人文社会科学部（文）・教授

研究者番号：10359268

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,200,000円

研究成果の概要（和文）：ポスト農業社会とは、1980年代以降の農業生産と都市消費者の農産物消費が連動しなくなった時代を指している。本研究では、この状況のもとでの農村の人間関係の形成について把握し、その意味を食、農、自然という三つの側面から分析することによって、新たな農業社会学構築の視点を得ることを試みた。その結果、農に関心を持ち農山村に向かう若者と地本住民との社会形成や、農村環境の環境化に伴う危うさ、さらに、水の守り手としての現代農業者の役割などを明らかにし、研究成果として公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代農村は明らかに岐路に立たれている。その一つに、人口減少が今後も続く中での農山村の集落存続が模索されていることがある。けれども、農業は、その立て直しのなかで重視されていない。その理由は、農山村の場合、農業は衰退産業とされており、産業としての立ち直りの契機がみえないからである。しかし、本研究では、経済的な側面以外の農業の地域社会維持機能に注目する事により、農山村における小規模な農業、経済的な意義がそれほど大きくない農業の社会的な価値について多面的な把握を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：The term “post-agricultural society” refers to the era after the 1980s when agricultural production and the consumption of agricultural products by urban consumers became disconnected. In this study, we attempted to understand the formation of human relationships in rural areas under these circumstances, and by analyzing their meaning from the three aspects of food, agriculture, and nature, we tried to gain a perspective for constructing a new sociology of agriculture. As a result, we clarified the social formation between young people who are interested in agriculture and heading towards farming and mountain villages and the local residents, the precariousness associated with the environmentalization of the rural environment, and the role of modern farmers as protectors of water, and announced these as research results.

研究分野：環境社会学

キーワード：農業社会学 食と農 移住者 農山村 環境化 農山村イノベーション 水保全

1. 研究開始当初の背景

農業社会学は、20世紀の末までにアメリカ合衆国の農村社会学で輪郭を整え、新しい農村・農業研究の手法として日本の社会学に導入された。一方、本研究は、日本社会に固有な状況を出発点とした。食と農の問題と、農村の自然資源管理問題への関心の高まりが、農村研究、環境研究という枠組みを超える農業社会学の必要性を研究者に実感させたのである。その可能性を持つ理論的枠組みに、本研究のメンバーでもある徳野貞雄が提案した生活農業論があった。

生活のなかに農業があるという主張点が注目されることが多い生活農業論は、当事者である農家の視野からみた生活の組み立て方を、次の4アスペクトにまとめたものである。〈ヒト〉(個人の行動)〈クラシ〉(家族等、生活の組織化)〈モノ〉(農産物や農地、自然環境等、物的対象への働きかけ)〈カネ〉(農業所得等の経済活動)の4アスペクトである。さらに、それらのアスペクトは、農家生活において互いに連関しながら、生産と生活が緊密に結びついていて日本の農村生活の持続性を支えているとされる。

生活農業論は、農学的な生産力農業論との論争のなかで考案され、社会と農業等の自然とのつながりを重視する。さらに、より重要な点として、農家は、生産者として社会と関わりつつ、農という自然環境への働きかけを行っていることがある。生活農業論は徳野の独創的アイデアだが、社会と自然という二分法を超えて課題の連鎖を追いかける方法は、人間と自然との分断を虚偽と考え、社会事象における人間と自然との連関をネットワークとして明らかにしようとしたフランスの科学社会学者、B.ラトゥールらの、アクターネットワーク論の方法とも重なる点が多い。ハイブリッドな事象の研究では、社会と自然の二分法を超える、社会学の方法が必要とされるからである。

生活農業論の登場は、農村と環境という研究分野を超えて、食と農の関係の疎遠化と自然資源管理の弱体化という、現代日本の人びとの生活が直面する2大問題のつながりをみなおし、“農”について考える機会をもたらした。農業社会学の構築という方向での、農村社会学と環境社会学の協働の方法がみえるようになってきていたのである。これが、本研究が構想されるにいたった背景である。

2. 研究の目的

このような状況を踏まえ、本研究では、食・農・自然という3つの視点から、ポスト農業社会の農村生活に照応する農業社会学の構築を目指すことにした。具体的には、環境社会学と農村社会学の方法論を持ち寄り、“農”について食と自然の双方から研究を行い、農業社会学の研究領域を多数の事例調査から積み上げ式に明らかにする。検討課題は、()ポスト農業社会深化の契機となった農業近代化政策への農家・地域住民の評価、()販売農業および自給的な農的活動と消費者との関係、()食と農、自然環境をいかす村づくりの計画手法の3つである。

3. 研究の方法

本研究では、フィールド調査とモデル構築を目指す研究会とのサイクルを確立し、それに基づいてすすめた。この“サイクル”は、フィールド調査とモデル構築が相互に影響を与え合うものである。調査対象として、生活農業論にジェンダー論を加え、個人の行動、農家・農村基盤研究、女性の活動、生活組織化の様相、物的対象(自然環境等)への働きかけ、経済活動と消費者との関係の5アスペクトを設定した。それらのアスペクトについて、フォーカスグループインタビュー、集落戸別訪問調査を行なった。さらに、研究メンバーの多くが、農村と環境の双方の研究への知識を有する点を踏まえ、下表のようにモデル構築上の役割を分担した。ただし、目的はアスペクト間の“連関”の把握と分析においた。

本研究は、柔軟に対応可能な研究を行うため、以下の3つのコアプロジェクトを編成し、それに基づいてすすめた。その際、共通フィールドとして、大分県中津市耶馬溪町下郷地区を設定し、さらに、兵庫県豊岡市、岐阜県郡上市和良町、佐賀県佐賀市等のサブフィールドでそれぞれ調査研究をすすめた。調査の手法はヒアリング調査に加え、一部に質問紙調査も取り入れた。そのうえで、それらのデータを研究会にフィードバックして、モデル構築についての検討を行った。検討では、過度に抽象度の高い概念図式に成果を落とし込むのではなくて、地域特性に沿ったケーススタディを積み重ねる方法をとった。これは、積み上げ方式のモデル構築という当初の方針に沿ったものである。以下、3つのコアプロジェクトについて説明する。

(a)食・農・環境からみた農業近代化政策の評価

農業近代化政策が本格化したのは、1961年の農業基本法制定以降とされる。その渦中では、農業の化学化による生物の死滅や人への健康被害が問題視された。一方で、この政策が農業の工業化を促し、生産性の劇的な向上を実現したことも事実である。そこで、コウノトリや魚類など、生物を軸にした環境保全型農業で知られるようになった、兵庫県豊岡市、岐阜県郡上市で調査を実施した。調査により農業近代化が社会と自然の双方にもたらしたインパクトを多面的に把握し、農業社会学の領域に本テーマを位置づけた。

(b)販売農家の農業および自給的農業と消費者との関係

農村社会学は、消費者と関係が深い販売農家を扱うことが多いが、環境社会学では、水田、水路

での漁撈などの副次的生業や、棚田等の自給的農業への関心が高い。ただ、食と農という観点からの研究は十分ではない。そこで、佐賀県佐賀市において、消費者との関係に留意して、調査を実施した。調査から多様な農的な活動が抱える課題を抽出し、農業社会学の研究領域に本テーマを位置づけることにした。

(c) 食と農、環境をいかに村づくりの計画手法

ソーシャル・ビジネス・プロジェクトや、農家の食品製造・加工ビジネスなど、食、農、自然環境の組み直しが見られる村づくりをとりあげる。大分県中津市下郷地区を中心に、都市の消費者、さらに女性の活動にも留意しつつ調査を実施した。生活と密着した食・農・自然に基礎におく村づくりの計画手法を明らかにし、他プロジェクトとの関連を示しつつ、農業社会学の研究領域に本テーマを位置づけようと試みた。

このような3つのコアプロジェクトによる研究組織の存在は、Covid-19 感染症拡大によりしばしば現地調査や対面方式での研究会開催を中断せざるをえないという状況下での研究遂行において、当初予期していなかった効果を発揮した。人間関係の構築されているそれぞれのフィールドについては、比較的スムーズに研究を再開できたからである。

4. 研究成果

本共同研究の成果は大きく2つの領域に分けることができる。第1の領域の研究成果は、環境社会学関連の研究成果で、第2の領域の成果は、農業・農村研究における社会的イノベーション研究の重要性の提起である。

第1の領域である環境社会学関連の研究成果を、ここで報告する。研究代表者の牧野は、2022年、International Rural Sociology Association (IRSA) 大会セッション (WORLD CONGRESS OF RURAL SOCIOLOGY 2022年7月22日) において、“Analysis of traditional rural water use systems’ revival in cities based on the Sociological Media Theory A case study of water environment policy in a provincial city in Kyushu Japan” を口頭報告した。その報告を基に著作を構想し、科研分担者である藤村美穂、川田美紀を共同編集者として『入門・環境社会学 現代的課題との関わりで』を出版した。

本科研と関わる執筆者の著作は以下のとおりである。

第1章 水から何をみるのか (牧野 厚史)

第2章 アジア途上国の水問題の諸相 (Ariyawanshe I.D.K.S.D, 森本 実穂, 藤村 美穂)

第3章 流域社会の現在 (藤村 美穂)

第4章 上流社会が抱える課題 (牧野 厚史)

第8章 地域社会におけるリスクと人びとの対応 (五十川 飛暁)

第2の領域の研究成果は、農業・農村研究における社会的イノベーション研究の重要性の提起である。分担者の靄理恵子は、「移住者と共に暮らしを繋ぐムラ 大分県中津市耶馬溪町下郷地区」(秋津元輝・山下良平・靄理恵子 責任編集「若者と創る農山村イノベーション」)『農業と経済』2022年夏号を執筆した。さらに、この論文の成果を基に、日本村落研究学会第71回大会において他の研究者の参加の下で「農山村イノベーション ポスト農業時代の農の活かし方」と題するテーマセッションを開催した。

テーマセッションの趣旨は、以下のとおりである。グローバリゼーションの深化、地球規模の環境問題、気候変動に伴う災害の多発、そしてネオリベリズム全盛の時代である。今、村落研究で問うべき課題は何だろうか。2021年5月、農水省により発表された「みどりの食料システム戦略」は、関係者の間で大きなインパクトを持って受け止められた。政策論の観点からは、政策への目配り、政策への提言は必要である。それと共に、そうした提言へとつながる、実証的研究もまた求められている。本テーマセッションでは、「農山村イノベーション」をキーワードに、農山村および都市からみえる暮らしの維持・豊穡化のしくみを明らかにしようとした。

2023年12月3日(日)：メイン会場(夢ランドしらさぎ 島根県安来市)

テーマセッション名「農山村イノベーション ポスト農業時代の農の活かし方」

コーディネーター 靄理恵子

報告者のうち本科研関係の報告は、以下のとおりである。

主旨説明(報告者：靄理恵子)

第1報告 農事組合法人を用いた集落発の農山村イノベーション 大分県中津市樋山路の農事組合法人の事例から(報告者：牧野厚史)

第2報告 環境化時代における農地保全の意味問題と村落運営 コウノトリ野生復帰事業が展開する兵庫県豊岡市の二つの村落の事例から(報告者：山室敦嗣)

なお、本テーマセッションの内容については、『年報 村落社会研究』第60号(2024年公刊予定)で公表される予定である。

以上のように、本共同研究では、その成果の多くを、著書・論文集のかたちで公表することが

できた。そのなかでも、農山村イノベーション研究を日本の村落研究のなかに持ち込んだことは、大きな成果であると考え。

最後に、本研究の限界についても触れておく。本研究では、積み上げ式のモデル構築という手法をとったが、その成果をより一般的な農業社会学の構築と結びつけるにはいたっていない。日本の農村・研究における汎用性の高いモデルの構築には、さらなる調査研究が必要であるからである。なお、本科研メンバー単独の研究成果については、各年の報告書で報告している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 藤原 未奈, 早崎 水彩, 北村 美香, 上原 三知, 瀧 健太郎, 牧野 厚史, 嘉田 由紀子	4. 巻 27
2. 論文標題 球磨川周辺における令和2年7月豪雨犠牲者の被災要因に関する聴き取り調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 242-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徳野貞雄	4. 巻 59
2. 論文標題 アクションリサーチという問い フィールドとの向き合い方を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 年報 村落社会研究	6. 最初と最後の頁 91-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Muslim Ahmad Imam . Fujimura Miho . Kazunari Tsuji . Salam Muslim	4. 巻 2023.8.463
2. 論文標題 Small-Scale Marine Fishers' Possession of Fishing Vessels and Their Impact on Net Income Levels: A Case Study in Takalar District, South Sulawesi Province, Indonesia	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Fishes	6. 最初と最後の頁 1-17 (Online)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/fishes8090463	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 靄理恵子	4. 巻 Summer
2. 論文標題 移住者と共に暮らしを繋ぐムラ - 大分県中津市耶馬溪町下郷地区	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊 農業と経済 特集 若者と創る農山村イノベーション - コロナ後を見すえて	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 霧 理恵子	4. 巻 313
2. 論文標題 東日本大震災・福島原発事故による生活環境破壊からの再生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修大学人文科学研究所月報 = Senshu University Institute of Humanities Monthly Bulletin	6. 最初と最後の頁 29～43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34360/00012242	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 霧 理恵子	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 「他の選択肢もある」という現実の把握とその提示から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 有機農業研究	6. 最初と最後の頁 21～24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24757/joas.13.1_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 霧 理恵子	4. 巻 13(2)
2. 論文標題 有機農業と現代の小農・家族農業の関係を問う：論点提示と研究課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 有機農業研究	6. 最初と最後の頁 2～11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24757/joas.13.2_2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳野 貞雄	4. 巻 13(2)
2. 論文標題 日本における小農・有機農業・生活農業論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 有機農業研究	6. 最初と最後の頁 26～38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24757/joas.13.2_26	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原未奈, 早崎水彩, 北村美香, 上原三知, 瀧健太郎, 牧野厚史, 嘉田由紀子	4. 巻 27
2. 論文標題 球磨川周辺における令和2年7月豪雨犠牲者の被災要因に関する聴き取り調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 242 ~ 250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 牧野厚史	4. 巻 70
2. 論文標題 湧水のある暮らし 阿蘇の湧水と人びとの暮らし 地域の古層から探る水利用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 水の文化	6. 最初と最後の頁 30 ~ 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 近藤 祉秋, 合原 織部, 福本 純子	4. 巻 57
2. 論文標題 「ジビエ」化する獣肉 : 九州山地A村B 地区における野生獣肉販売事業の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 121 ~ 161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81013082	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳野貞雄	4. 巻 48
2. 論文標題 戦後日本の農村社会学は、何を追いかけてきたのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会分析	6. 最初と最後の頁 7-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本貴文	4. 巻 48
2. 論文標題 環境保全からみた地域社会の変容 福岡県柳川市の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会分析	6. 最初と最後の頁 67-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松岡崇暢, 本田恭子・福本純子	4. 巻 4
2. 論文標題 獣害対策に向けた小水力発電の導入が山口県下の農山村に与えた影響 農山村の持続と再生に寄与する地域づくりの発展	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮崎大学地域資源創成学部紀要	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 牧野厚史
2. 発表標題 農事組合法人を用いた集落発の農山村イノベーション 大分県中津市樋山路中組の農事組合法人の事例から
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 MAKINO Atsushi
2. 発表標題 Analysis of traditional rural water use systems' revival in cities based on the Sociological Media Theory A case study of water environment policy in a provincial city in Kyushu Japan
3. 学会等名 WORLD CONGRESS OF RURAL SOCIOLOGY (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山室敦嗣
2. 発表標題 環境化時代の農地保全における農地の意味と村落運営 コウノトリ野生復帰事業が展開する兵庫県豊岡市の二つの村落の事例から
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 牧野厚史
2. 発表標題 農事組合法人を用いた集落発の農山村イノベーション 大分県中津市樋山路の農事組合法人の事例から
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 靄理恵子
2. 発表標題 農山村イノベーション ポスト農業時代の農の活かし方 (コーディネーター)
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 徳野貞雄
2. 発表標題 ポスト農業社会の憂鬱
3. 学会等名 西日本社会学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 徳野貞雄
2. 発表標題 天性の農村社会学者 山下惣一氏の社会的影響
3. 学会等名 社会分析学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 徳野貞雄
2. 発表標題 「T型集落点検」から見た都市近郊山村の他出子との生活維持の関係 U(O) ターン、I(Q) ターン、他出子の再考
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 徳野貞雄
2. 発表標題 過疎地住民の定住化に対する葛藤 ある過疎自治体の役場職員への調査から
3. 学会等名 西日本社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 徳野貞雄
2. 発表標題 「T型集落点検」からみた「槻木プロジェクト」のリアル(社会過程)
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 靄理恵子
2. 発表標題 「越境」する人々と「信賴貯金」 - 地域おこし協力隊0BOGの語りから
3. 学会等名 西日本社会学会第79回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福本純子
2. 発表標題 若者（大学生）の原子力発電についての意識：研究ノート（続）
3. 学会等名 西日本社会学会第79回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 徳野貞雄
2. 発表標題 小農・家族農業と有機農業 - ローカルからのアプローチ
3. 学会等名 日本有機農業学会社会科学系テーマ研究会 「有機農業と現代の小農・家族農業の関係を問う」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徳野貞雄
2. 発表標題 戦後日本の農村社会学は、何を追いかけてきたのか
3. 学会等名 社会分析学会 第140例会 シンポジウム 「家族と地域社会の持続可能性」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本努・福本純子
2. 発表標題 若者（大学生）の原子力発電についての意識：研究ノート
3. 学会等名 西日本社会学会第78回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福本純子
2. 発表標題 過疎農山村における社会的排除とムラの自律的対応 広島県庄原市 X 集落における稲作縮小の事例から
3. 学会等名 日本社会病理学会第36回大会 テーマセッション 「若手・中堅にとって の社会病理学の可能性 現代の社会的排除を捉える方途 」 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山室敦嗣
2. 発表標題 フィールド調査は何を「問い」にできる/ できないのか？ 社会調査のパンドラの箱を開ける試み
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会 シンポジウム ラウンドテーブル形式(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 牧野厚史(分担)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 232
3. 書名 入門・社会学 現代的課題との関わりで	

1. 著者名 牧野厚史（編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 216
3. 書名 入門・環境社会学 現代的課題との関わりで	

1. 著者名 藤村美穂（編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 216
3. 書名 入門・環境社会学 現代的課題との関わりで	

1. 著者名 川田美紀（編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 216
3. 書名 入門・環境社会学 現代的課題との関わりで	

1. 著者名 山室敦嗣	4. 発行年 2023年
2. 出版社 福岡市	5. 総ページ数 874
3. 書名 新修福岡市史民俗編三 夜	

1. 著者名 福本純子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 742
3. 書名 環境社会学事典	

1. 著者名 牧野厚史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 742
3. 書名 環境社会学事典	

1. 著者名 藤村美穂	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 742
3. 書名 環境社会学事典	

1. 著者名 徳野貞雄	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 192
3. 書名 新・現代農山村の社会分析	

1. 著者名 川田美紀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 742
3. 書名 環境社会学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	五十川 飛暁 (ISOGAWA Takaaki) (00508351)	四天王寺大学・人文社会学部・講師 (34420)	
研究分担者	つる 理恵子 (TSURU Rieko) (20227474)	専修大学・人間科学部・教授 (32634)	
研究分担者	徳野 貞雄 (TOKUNO Sadao) (40197877)	熊本大学・大学院人文社会科学部(文)・名誉教授 (17401)	
研究分担者	川田 美紀 (KAWATA Miki) (40548236)	大阪産業大学・デザイン工学部・准教授 (34407)	
研究分担者	藤村 美穂 (FUJIMURA Miho) (60301355)	佐賀大学・農学部・教授 (17201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 貴文 (NATSUMOTO Takafumi) (70611656)	國學院大學・研究開発推進機構・准教授 (32614)	
研究分担者	山室 敦嗣 (YAMAMURO Atsushi) (90352286)	兵庫県立大学・地域資源マネジメント研究科・教授 (24506)	
研究分担者	福本 純子 (FUKUMOTO Junko) (50851606)	福岡県立大学・人間社会学部・講師 (27104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関